

Bruno Mars 24K Magic Tour

("FOH on-line" Written by Kevin M. Mitchell)

新来の FOH、モニターエンジニアが繰り広げるパーティの続き

Bruno Mars の 24K Magic ワールドツアー。そのテーマは、パーティである。

「出来る限りビッグなパーティを開催する、という明瞭かつシンプルなテーマに基づいて、この show の雰囲気を作っています。」と語るのは FOH エンジニアの Chris Rabold。「Bruno の細部まで配慮する丁寧な仕事ぶりは周知の事実ですが、この show はその代表例です。サウンド、ダンス、照明・ビデオ・パイロ、様々なキューに至るまで、彼自身が関与しなかった部分はありませんでした。全てに狙いがあるのです。」

Rabold とモニターエンジニアの Ramon Morales には、共通点がいくつかある。1 つはどちらも DiGiCo SD7 を使っていること。もう 1 つは 2 人にとってこれが Mars との初のワールドツアーだということ。ラジオでかけるのにベストな曲は何か、といつも尋ねられるがうんざりしていない、ということ。Rabold は「Uptown Funk です。(『意外と●●ではないんです。良かった！』また Morales は「Epic の歌。未だに好きです」)

Mars のツアースケジュールを見ると冷や汗がでできそうだ。 - かなり過酷である。3 月下旬にベルギーで初日を迎えたこのツアーは、4 月～6 月中旬までヨーロッパツアーを行い、その後 7 月 15 日から 11 月 11 日まで行われる、大きな北米ツアーが始まった。(現在) その後、南米での show が続き、2018 年にかけてメキシコでのライブが行われた後、2 月末から 3 月までニュージーランドとオーストラリアでのツアーが予定されている。

Rabold は、スタッフ共々トラブルなく順調に進んでいる、と語る。Mars のボーカルを保ちながらパワフルなバンドミックスに乗せることが日々の挑戦だという。「Bruno は絶え間なく動き続けていますし、隠れ蓑になるトラックボーカルもありません。非常にリアルです。ボーカルがこれだけ動いていると、マイクがじっとしていることは望めませんので、レベルだけでなく、調性を維持するのも難しいのです... これが挑戦です。」

#数々のめぐり合わせ

Rabold はここ 20 年ほどジョージア州 Athens で暮らしているが、ケンタッキー州 Bowling Green とテネシー州 Chattanooga で育った。19 歳で『様々な状況が重なり』、Widespread Panic の仕事をするようになった。「自分が一番下っ端でした。1 台のトラックに全部積み込んで、商品売り、セッティングを手伝ってマイクを仕分け、飲み物を準備していました。」この経験から、彼はテネシー州 Marfreesboro のミドルテネシー州立大学に進学しレコーディング業界のカリキュラムで学んだ。その後、少し有名になった Wide Spread Panic とまた仕事をするようになった。

「それから、また『様々な状況が重なり』、色々なジャンルのアーティストと一緒に仕事をするようになりました。」と Rabold。さらに言うと、Beyoncé、Lady Gaga、Kenny Chesney、Florence + the Machine、Norah Jones などだ。

Bruno 側から Rabold に最初の要請があったのは今年の夏。それから LA で Mars の 24K MAGIC ツアー用リハーサルが始まった。Rabold はプライベート show を何回かミキシングし、10 月に行われたあの大規模な Saturday Night Live も担当した。その結果今回のワールドツアーも引き続きミキシングを行うことになった。

このツアーにあたって、彼と Morales は Burbank の CenterStaging でしばらく行われたバンドリハーサル、Rock Lititz で数週間行われたフル制作リハーサルに参加した。その後約 3 か月間のヨーロッパツアーを経て、この show をそっくりそのままアメリカ大陸に持ち込んだ。

FOH にて、Rabold が Mars を含めたミュージシャン 9 名のミキシングをする卓は DiGiCo SD7。「好きな卓は何台かありますが、ほぼデフォルトは SD7 です。」と Rabold。「機能がフレキシブルなところもこの卓を選ぶ理由です。サウンド的には見えないので聞かしかないので、音響的に良くも悪くも何とでもできるところが素晴らしいです！処理が必要なプリベークのサウンドがないのです。」また、緊張感の中で念入りな作業が必要となるプロモ中に卓に感謝した、と付け加えた。「Bruno は 5 秒で 10 のことを望むような人なのですが、卓もそれに順応してくれる。私はスナップショットをよく使うのですが、これもまた、ただ早いと言う理由からです。それがとても重要な事なのです。彼も Morales も SD7 を 96Hz で使っている。

このツアーでは Clair Cohesion システムを使っている。必要なのは大規模なシステムであったため、Mars の音響は Clair が担当している。Rabold にとっては Clair 機材で回る初めてのツアーであった。「この機材に何を期待できるのか分かりませんでしたが、これまで使ってきて、いい結果も出ているし、最高にハッピーだと言いたいです。このシステムを一言で表現しろ、と言われれば、そうですね、『がっしりしている (solid)』と言う感じでしょうか。ただ、最初は私の好きなサウンドよりも抜けている (bright) と感じたのですが、システムの機能をうまく使えば好みに合わせられるようになり、調整した甲斐がありました。必要なことは多かれ少なかれ周波数スペクトルで実行できます。これについて Clair は音調のオプションを上手に提供してくれました。私個人は一度ミキシングすると、一切 PA システムを聞きたくありません。実際、我慢が出来ないのです。スピーカーではなく、音楽を聞きたい。Cohesion ではすぐにそれを叶えることが出来ました。」と語った。

また、Rabold は「このツアーに携わる前はプラグインのみ使っていましたが、予算やトランポなどの問題がクリアになるならハードウェアも混ぜて使うのが好きなのです。選択肢が増えますし、クリエイティブにならなければいけない状況が良いんです。DiGiCo を使っている時は Waves のみです。もっとやりたいのですが、少し複雑になるので、現状ではそのプラットフォームです。」と語った。

ハードウェアに関して、新しい製品を show 中に試してみたい気持ちはあるのだが、過去に試して確実だと思う物を使い続ける傾向があるという。「個人的には、API、Sonic Farm、Empirical Labs などがそれにあたります。このツアーでは Rupert Neve MBP が面白かったです。これは私にとって新しい機材でした。ここ数年、Overstayer が出している機材でいくつか気に入った物があります。ミキシングを始めとする創作期間に入ると、色を提供するツールが大好きです。ラックに入れる機材に関して言えば、ダイナミックコントロールだけを求めている訳ではありません。この点では Overstayer の Jeff Turzo には頭が上がりません。彼の製品についてあまりうまく言えないのですが、彼がやることは真の芸術だと思います。」

Mars はマイクの好みがとても強く、取り組んでいるジャンルに関係なく、好みによって決定すると言う。ドラムには Shure、Telefunken、Mojave、ギターには AT4050、SM57、Royer 122、Leslie には Sennheiser 906 と Beyer M88 を使い、ホーンに DPA 4099、DI はバス以外 Radial で、それ以外は Avalon U5 を使っている。「ヴォーカルは全員 Sennheiser 9000 シリーズですが、Bruno は古い 5235 が一番自分に合うと気に入っていて、結局今回もそれを使うと決めたようです。」

#モニターワールド

Morales の出身はヒューストン、彼はそこを故郷と呼ぶ。子供の頃バンドをやっていた、ギタリストになりたかったと言う彼は、夢を追い求める中でミキシングにより興味を抱くようになった。「バンドで演奏するのと同じくらい魅力的でした。いや、それ以上だったかも」と彼は言う。「それから少し経って、ミキシングの世界へ足を踏み入れました。当時、ミキシングについてあまり知識はなかったのですが、チャンスがあれば、ミキシング卓を手に入れようと頑張っていました。」大学では建築を学ぶつもりだったが、録音技術を勉強する芸術専門学校へとあっさり方向転換した。その後、SugarHill Recording Studio でインターンシップを経験し、エンジニアとして雇われた。

「エンジニアの中に、地域のテキサス人バンド、The Hometown Boys の FOH をミキシングしている人がいたんです。ある日、彼は私がこのバンドのモニターをミキシングすることに興味があるか尋ねてきたのです。もちろん、『yes』と答えました。」と Morales。これが彼にとって最初のツアーギグとなった。「卓は Peavey Mark 3 の 16ch ミキサーでした。これには 2x AUX センド、1x リバーブセンドがあって、別のミックスとしてフェーダーを使いました。」当時、まだスタジオで働いていた彼は、ひょんなことから『No No No』で初のヒットを記録した Beyoncé、Kelly Rowland、Michelle Williams から成るバンド Destiny Child と仕事をすることになった。Morales はこのバンドがまだ CD 制作していなかった時代、Beyoncé の父親 Mathew Knowles と show の編集作業をしていたという。それから数年後、Morales は彼女たちのツアーで FOH をミキシングすることになる。

初期段階で Morales はモニターミキシングに移り、Mary J Blige、Mariah Carey、Usher、Lady Gaga、Ricky Martin などの仕事をこなした。「ある日電話がかかってきて、Bruno のモニターをミキシングすることに興味があるか聞かれました。あんな才能のあるアーティストに、NO なんて言えませんでしたよ。」

「show に向けて多くのリハを行いました、リハ日はグラミー賞のようなイベントとイベントの間に組み込まれていましたので、リハの前半は CennterStaging に泊まり込んでいました。その後、プロダクションリハーサルのために Rock Lititz に移りました。素晴らしい施設であるのは言うまでもないのですが、音響会社の隣にあるというのはすごくいいですね」と Morales。Clair が Rock Lititz 複合施設のアンカーテナントであることを付け加えた。

DiGiCo SD7 は、導入されて以来、選択し続けていると言う。「レイアウトが秀逸しているのです。すべてがあるべき所に留まっていて、かなり気に入っています。今回のツアーでは Universal Audio プラグインを使用していますが今のところ順調です。いい音のプラグインにアクセスすることで何もかもが変わります。Universal には多くの選択肢があり、現段階では信頼性もあります。バンド人数が多いためインプットがかなり多く、アウトプットのにも広範囲です。セッション構成をやり直すときは、DSP 用にチャンネルを 1 つ残していました - 私自身ここまで続けられるとは思ってもみませんでした、まだやれています！Chris と同じく、96kHz でやっているのも、もちろん DSP は使うんですが、音的にはかなり変わってくるため、常に 96kHz にしておきたいと思っています。」

Morales は SD7 以外ほとんど外付け機材を使っていないが、温かみを少し足すため Mars 用ヴォーカルに Avalon 737 を使い、Boraasti M7 リバーブや TC システム 6000 をあらゆるエンジンに広げて使っている。「DiGiCo のリバーブとディレイも使用しています。また、ダイナミック EQ とコンプレッサーを使っているインプットもありますが、これには満足しています。音質がとても良く、素晴らしい組み合わせです。」と Morales。

「IEM は、ステージにいる全員が JH Audio を使用しています。Mars は JH16 ですが、JH16v2 が多数です。ワイヤレスシステムは Shure PSM1000 です。show の間、バンドミキシングに触るフェーダーは限られています。生のバンドですから色々変わったりすることもあり、準備が必要です。」

このパーティは北米で毎週 5 公演、11 月まで行われる。「Bruno は show に来てくれた人が人生で最高の夜だった、と帰り道に思ってもらいたいと望んでいます。」と Rabold。「それは過言ではなく、文字通り show の目標となっています。確かに高尚な目標であり、すべきことがたくさん出てくるのですが...。公演の成功と観客の反応の良さを感じながらツアーに出られているので、今本当にやりがいを感じています。」

Bruno Mars 24K Magic Tour Crew FOH Engineer: Chris Rabold Monitor Engineer: Ramon Morales Sound Co: Clair Global Systems Engineer: Chris "Sully" Sullivan RF Tech: Paul Tobey Monitor Tech: Scotty McGrath PA Techs: Bobby Taylor, Andrea Espinoza	Gear FOH Console: DiGiCo SD7 Speakers: Clair Cohesion System (CO-12/Mains, CO-8/Side Hang, CP-218/Subs (flown) Amps: Lab.gruppen Processing: Lake, SMAART Plugins & Hardware: Waves, Overstayer, API, Empirical Labs, Neve	MON Console: DiGiCo SD7 Wireless: Shure PSM1000, Jerry Harvey Audio IEMs Mics: Sennheiser 9000 Series (vocals), 5235 (Bruno Mars vocals), Mojave, Shure, AT, Royer, DPA
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------